
Persona4 ~ The Winter Vacation ~

柚子うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Persona 4 ~ The Winter Vacation ~

【Nコード】

N9385Y

【作者名】

柚子うさぎ

【あらすじ】

マヨナカテレビ事件から9ヶ月辺り経った・・・また稲葉市八十稲葉にやってきた冬休みの話。主人公の名前はアニメと同じで鳴上悠です。性格はアニメだけじゃ把握できなかったので主にドラマCDを参考にしてます。

Meeting Again

マヨナカテレビ事件が終わり、あれから9ヶ月辺り経った。二〇一二年一二月——とある田舎町「稲羽市八十稲羽」にまたやってきた。空を見上げるとチラチラと雪が降ってる。八十稲羽駅には荷物を持ったクールな雰囲気漂う一人の高校生の姿があった。名前はなるかみゆう鳴上悠。

辺りを見回すと人影はない。ふうと白い息を吐いたあと、寒さのせいか身震いした。

「寒っ……」

携帯電話で時間を確認し、叔父である堂島に電話し始めた。

「もしもし、堂島さん？ 悠です」

「ああ、悠か。今手が離せなくなっちゃったんだ……。せつかく久しぶりに来てくれたのは良いんだが……。悪い」

「いえ、大丈夫ですよ。あ……明日はクリスマスイブなので、忙しいかもしれないですが堂島さんもプレゼントだけは準備してて下さい」

「わかったわかった。すまんが今日は帰り遅くなるかもしれん……」

「はい、分かりました」

「あと、お前に話すことあったんだが……なんだっけな？」

「……？」

少しの沈黙したあと堂島は何かを思い出したのか、電話越しにああ、そうだという声を出した。

「それにしてもいいのか？ お前が今日来ること菜々子に内緒にし

ておいて……」

「ええ、内緒にしておいて下さい。菜々子を驚かせたいので……」

「ははっ、そうか。菜々子不思議がってたぞ。一応、仕事場からの電話だと言っておいたが……」

鳴上はクスツと笑い、話し出す。

「それって堂島さん、誤魔化すのが苦手だからでは……？」

「！？ おまつ！ んー、まあいい。悠、言うようになったな……。改めて菜々子のことよろしく頼む。じゃあな」

電話を切ると、ポケットの中に入れた。

「さて……。買いにいくか」

それからジュネス八十稲羽店に向かう。それは稲羽市郊外に位置する大型チェーン店のスーパー「ジュネス」の支店。一般食料品や洋服はもちろん、伊勢エビやキャビア等の高級食材も色々揃っているらしい。

他にはフードコートや屋外遊技場、果ては家電製品まで取り揃えてあり、規模としてはスーパーというよりもショッピングモールといったほうが正しい。

鳴上はその一階行き、欲しい商品を手にとってカゴに入れる。

その姿にとある高校生くらいの茶髪の店員が一足先気付く。

「ん？ あれ？ 相……棒？」

聞き慣れた声でしたので、振り返るとその声の主は手を軽く挙げて挨拶してきた。市内にあるデパート「ジュネス八十稲羽店」店長の息子である花村陽介だ。はなむらようすけ

「陽介……?」

「よう、やっぱり鳴上じゃん！ わざわざここまで来たのってなんかの用事？ それにしても久しぶりだな、会うの」

「ああ、久しぶりだな。今日はちよつと遊びにきたんだ、それに冬休みだし。もうすぐクリスマスだし…… ケーキとかプレゼント準備して菜々子を喜ばせたいなって」

「そうか。菜々子ちゃん喜ぶな。相棒、ほんと水臭いな！ ここに来るんなら一応連絡してくれたら良かったのによ」

「ごめん。驚いた顔見れるかなって内緒で来てみたんだ。久しぶりに会えるの結構楽しみだったし……」

「へへっ、そうか。てか相棒、そのみんなに俺も含まれてるの?」

「……さあ、どうだろうね?」

「ちょ、ええ!? なにそれ!? 予想外の返事! 相棒ひでえよ

! 冷たっ!」

「……ふふっ。冗談だって、陽介。お互い相棒だろ?」

前に鮫川河川敷の河原で友情を確かめ合うために殴り合ったあと、親友の証として貰った友情の絆創膏を陽介に見せる。それを一目見ると鼻をこすって照れくさそうな陽介の表情見てクスクスと笑う鳴上。

暫く談笑していると後ろから「ヨースケエ」とかこの中の商品をガシャガシャと音を立てながら、走ってきた。

「ったく……クマ、床に落とすなよ。クリスマス用の商品なんだから」

「ヨースケ、わかってるクマよ! クマだってちゃんと成長してるクマね! って、ヨースケの隣にいるの……まさかのセ、センセイ!?」

「久しぶり、クマ」

「ほんとにセンセイ!? 夢じゃないクマ! お久しぶりクマ! センセイにまた会えるなんて嬉しいクマよ」

陽介の後ろからびよこつと現れたのがクマと呼ばれた金髪碧眼の少年、輝かしい瞳で手に持つてる買い物かごを見つめてきた。

「そういえば、センセイは何を買いにきたクマか?」

「さっきそのことを陽介と話してたんだ。クリスマスに使う飾りつけと材料と菜々子の喜ぶプレゼント買いに……ね」

「ナナちゃんの欲しいプレゼントクマか! クマもナナちゃんにプレゼントあげなきゃいけないクマね! それに遊ぶ約束したから!」

「クマ、それは分かるけど今は仕事な……終わってから買おうぜ?」

「ヨースケ、わかってるクマよ! クマ張り切って仕事するクマ! とりゃあーっ! 待ってて、ナナちゃんのプレゼントー!」

「ちよっ! おい、クマ! 張り切るのは良いけど、失敗して仕事増やすなよ」

「はいはい、わかってるクマよー!」

商品が沢山入ったかごを置いてから、商品を取り出し棚に並べる。熱心に仕事するクマを見て陽介は困った表情を見せ、頭を軽く掻いた。それから深い溜め息を吐く。

「ハア……。クマきち、そう言ってる時が一番失敗しそうだな……」

「なんか相変わらず大変だな。俺、手伝うか?」

「いや、いいよ。お前、買い物あるだろ。俺とクマ、仕事そろそろ終わりだから。その時、クリスマスのこと話そうぜ? 終わったらフードコートに集合な」

待ち合わせを決めると陽介とクマは一旦仕事に戻り、鳴上は買い

物をした。暫くし買い物が終わると、1年前に自称特別捜査隊の本部として使っていた椅子に腰掛けた。フードコートは自称特別捜査隊の本部……もとい溜まり場で、推理から雑談、テスト勉強までここで行うことが多い。ふと空を見上げると、雲一つない快晴。もうあのマヨナカテレビ事件を解決して以来、あの世界と同じような霧はなくなった。マヨナカテレビなどの全ての元凶であったイザナミを倒したことによって――。

鳴上はバッグから本を取り出し、読み始める。ふと空を見上げたり、フードコートで物を買う人を眺めたり、飲み物を飲みながら陽介達の仕事が終わるのを待っていた。暫くするとバタバタと聞こえる靴音が鳴り響く。

「悪い、鳴上！ お、遅くなっちゃった……」

「お疲れ、陽介。クマ。息切れしてるけど大丈夫か？」

「あ、ああ。へーきへーき。それより待たして悪かったな……」

「センセイ！ ごめんなさいクマ……」

二人とも椅子に座るとクリスマスについてどうするのか話し合うことにした。

「あ……クリスマスのことだけど、陽介達も家にくる？」

「お、おう！ もちろん、行く行く！ みんなで集まってクリスマスパーティーしようぜ！」

「うん。クマもクリスマスパーティーにもちろん行くクマよ！」

「……ありがとう。できたら、ケーキ作りとか飾りつけを手伝ってくれると有り難いんだけど……流石に菜々子が帰ってくる前までに俺一人じゃやり切れなさそうだし」

「おう、了解！ 任せといて！ クリスマスケーキはお前が作るんなら安心だな。じゃあ、完二にも連絡しておくぜ。あと女子だと直斗くらいか。流石にケーキ作りの時に里中、天城、りせ……あいつ

ら呼んだら——俺ら“物体X”で軽く死に至るかもしれないしな」

「……そ、そうだな」

「うつ。ヨースケ、サラツと怖いことをいうクマね……」

鳴上達は目をそらし苦笑しあう。鳴上と陽介には林間学校でのカレー、クマと完二は一旦打ち上げとして堂島家で行われた料理対決——菜々子が審査員でその題材が「オムライス」——千枝達の料理に苦い思い出があるからだ。

千枝達の料理の腕前は壊滅的であった——林間学校で作ったカレーの材料が人参、じゃがいも、玉ねぎ、ピーマン、まいたけ、ふきのとう、片栗粉、強力粉、キムチ、唐辛子、胡椒、チヨコ、ヨーグルト、魚介類、コーヒ―牛乳などらしいものを買って作り上げたもの——それはカレーとはとても言い難い。というより、カレー粉やルーが入っていない。カレーに遠ざかっているにもほどがある。陽介はそれを物体Xと名付けた。

陽介の食べた感想としては食感がジャリジャリしてる上にドロドロしていてブヨブヨのところもあり、生臭かったらしい。鳴上に至っては口に入れた途端、違和感があつたらしい。

ちなみにオムライスを食べた男性陣の感想は千枝のは普通にまずい、雪子のは素材の味が全くないというある意味奇跡的で不毛の味、りせのはフォアグラの食感は見当たらず舌が鈍痛するくらい辛く、後には鉄の味がしてきたらしい。

あれ以来、千枝達の料理は男性陣にとってトラウマになっている。

「まあ……去年のあいづらが作ったクリスマスケーキは直斗がいたおかげだからか、不味くなく済んだしな……」

陽介は溜め息を吐く。少しの間、わいわいとクリスマス話し合っていると、陽介に呼び出された完二と直斗の姿がチラツと見えた。

「お、きたきた！ 完二、直斗！」

「チイス。なんスか、花村先輩？ 急にフードコート集合って……」

「こんにちは。いきなり電話で今すぐジュネスのフードコートに來いって言われてビックリしましたよ。何かあったんですか？」

陽介の隣にいる人を見た二人は首を傾げ、じっと見つめる。

「ん？ あれ……花村先輩の隣、どこかで見たことあるような——
つて！ 鳴上先輩！？ 先輩じゃないっスか！？」

「ああ、完二も直斗も会うの久しぶりだな」

「チイス！ てか、先輩！ 来るなら連絡して下さいッスよ！」
「お久しぶりです、先輩……！ そうですね、巽君の言うとおり連絡して下さい。連絡して下さい、みんなで歓迎できたのに……」

「それは……ごめん。ちょっと内緒で遊びに來たんだよ。みんなの驚いた顔とか嬉しい顔見てみたくて……」

「そうッスかあ。先輩のちょっとしたサプライズってことスね！
それにしてもびっくりしたッスよ！ そういや、冬休みに先輩遊びに來ねえかなってさっき直斗と話してたんスよ」

「ええ。先輩を見送ったあとってなんだか寂しいなって感じてたんです……。でも、先輩がきたことで冬休み中はまた楽しくなりますね。ここに遊びに來て下さってとても嬉しいです」

照れくさくなったように帽子のつばで赤らめてる顔を隠して言う直斗。それに陽介、完二、クマは頷いた。

「よっしゃ、鳴上がいる間の冬休み遊びまкруうぜ！」

「陽介、遊ぶのは良いけど……宿題あるだろ？」

「うわぁ……。鳴上、それいつちゃう！？ いっちゃったか！
うう……。思い出したくもなかった」

陽介はがつくりしたようでボタンとテーブルに顔を伏せた。直斗は何かを思い出したようで、ゆっくりと口を開いた。

「あの……花村先輩、巽君と僕が呼ばれた理由って何なんですか？」

「そうッスよ！ 用って何なんスか？」

「あ、そうそう！ そうだった。明日はクリスマスイブだろう？ 今日菜々子ちゃんのために部屋の飾りつけやクリスマスケーキ作るってわけで」

「なるほど、それは良いですね。菜々子ちゃんきつと喜んでくれます。あ……でも、里中先輩達は呼ばないんですか？ 姿は見当たらないのですが……」

「そ、それはだな。直斗……。あいつらがいたら面倒なことになるからね」

陽介は直斗からの視線を外し、トラウマをまた思い出したようだった。その表情を見た完二は理解したようで腕を組んで頷いた。

「ああ、そういうことッスか……。呼ばれたメンツが直斗と俺なものなんか納得ッス！」

「で、でも、僕……！ そんな料理上手くないですよ？ レシピ見てもやっとなるようなものだし……」

「なにいつてんだよ、直斗。あいつらに比べたら相当な腕前だぜ？ 少しでもあいつらにその料理スキルあれば良いのに……」

「まー、花村先輩の言うとおりッスね。つか、クリスマスケーキ3回作り直したんだっけ？ 直斗？」

「はい、僕は最初見てただけなんですけどね……。里中先輩達の調理してるところを静観したら、これはまずいつて思ってしまった……。料理本の通りにケーキ作ったというか……そんな感じですね」

「怖っ……！ 直斗居なかったら、確実に俺ら“ジ・エンド”ってか……」

「うっ、想像しただけで怖いッスね……」

怯える男性陣——よっぼどのトラウマなようだ。首を横に振り、気を取り直した陽介はいつもの調子に戻った。

「時間も時間だし……さて、メンバー集まったことだし鳴上の家に行って作業するか」

「その前にヨースケ！ ナナちゃんへのプレゼントクマ！」

「あ、そうだったか。とりあえず今日は、飾りつけ終わってそれからプレゼント買いにいかねーか？」

「うん、分かったクマ！」

「そうですね、僕も飾りつけ終わってから買いにいけます」

「お、俺も……。あとで手芸屋に寄るか……な」

「よし、それで決まりだな！ そっぴや、鳴上は菜々子ちゃんへのプレゼント買い終わったか？」

「ああ、結構悩んだけどプレゼント買って来た。さてと……じゃあ、みんなそろそろ家に行こうか……！」

「おう！ 里中達に気づかれないようにな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9385y/>

Persona4 ~ The Winter Vacation ~

2011年11月28日00時52分発行